みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

MIYAKO TOWN DIGITAL MUSEUM
www.miyako-museum.jp

No.122

平成29年1月1日
みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL0930-33-4666
FAX0930-33-4667

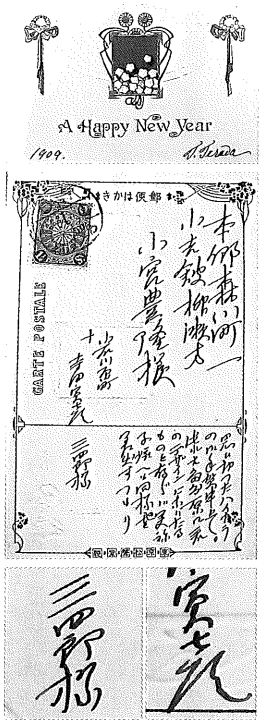
博物館新展示・ここに注目！
小宮豊隆資料「漱石コレクション」Vol.9

今年は夏目漱石生誕150年。没後100年の昨年に続き、文豪ゆかりの事物は注目の的で、博物館所蔵の「小宮豊隆資料」もその一つです。漱石の愛弟子で町出身の文芸評論家が愛蔵した、漱石ゆかりの逸品をご紹介します。

●寺田寅彦発小宮豊隆宛書簡 明治41年百

漱石の下には、各界で活躍する名士が集まり、その人脈は「漱石山脈」と形容されました。小宮豊隆と寺田寅彦はその中でも特に漱石に可愛がられた「主峰」であるとともに、二人は頻繁に書簡を交わす親友でした。こうして交わされた書簡のなかでとりわけユニークなのがここに紹介する絵葉書で、この一枚に漱石作品『三四郎』の世界や明治の世相が凝縮されています。

日露戦争後、通信手段として爆発的に流行した絵葉書に、作中人物・野々宮のモデルとされる寺田が、同じく主人公のモデルとされた小宮に「三四郎様」の宛名で年賀を述べています。さらにマドンナ・美禰子の名や葉書の意匠は作中登場の画家・原口（モデルは装丁画家・橋口五葉とも）作とする（事実らしい）など、作品と現実が交錯する世界が展開しているのです。



▲上：図柄/中：文面/下：宛名部分

講座・教室・催し物ガイド
1月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
1月7日(土)　9時30分～

【古典かな講座】
1月21日(土)　9時30分～

【みやこ学講座】
1月28日(土)　9時00分～

【古文書講座】
1月29日(日)　10時00分～

※見学会等は別途ご案内します。
※日程等変更となる場合があります。

歴史文化カレッジ講演&上演会

今回の講座は、「漱石」をテーマに次の内容と構成でお届けします。ふるってご参加下さい。

○第1部「漱石が愛した音楽」
バイオリン公演　山中恵理子氏

○第2部「漱石・小宮・寅彦(仮題)」
北九州市立文学館　中西由紀子氏

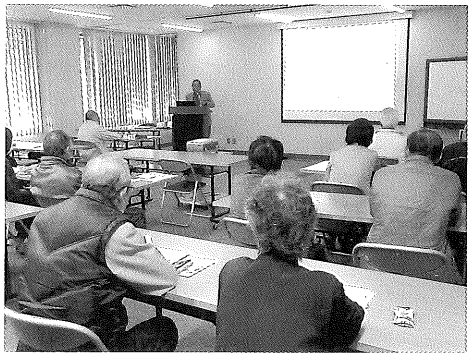
日時：1月29日(日)　13～15時
場所：博物館フロア・研修室
備考※定員(50名)有り・先着順〆切。
※参加費200円が必要です。

11・12月の業務日誌から

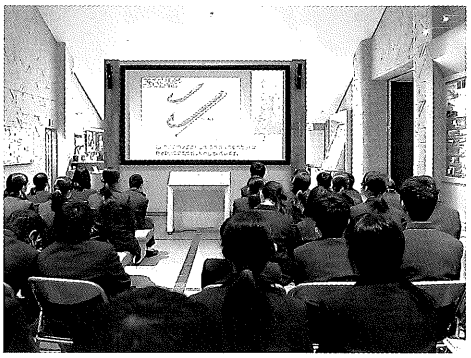
11月23日(水)、友の会主催「秋の史跡散策バスハイク」が行われ、維新のハイテク藩都・佐賀市を訪れました。
佐賀城本丸歴史館と佐野常民記念館を見学しましたが、両施設ともガイドボランティアが充実、楽しい学びの一日となりました。

▲復元された本丸御殿が見事なお城でした(鯱ノ門前で)。

11月26日(土)、文化遺産ボランティア養成講座に伴う第1回講座「まつりから見たふるさとの歴史と文化」が開かれました。犀川神事と九日祭を通して町の中・近世の歴史と文化を学びました。


▲長年まつりを究明された二人の先生にお話を伺いました。

12月1日(木)、育徳館中学校1年生120名が訪れ、博物館を利用した地域学習を行いました。育徳館は町や日本の発展に尽くした逸材を多数輩出しており、母校の重厚な歴史に想いが深まったようです。


▲館内設備を利用して町や母校の歴史を詳しく学びました。

12月3日(土)、友の会恒例の「三重塔すす払い」が行われました。今年は例年にない好天と多数の参加者に恵まれ、作業が1時間もかからずに終了しました。
参加頂いた皆さん、お疲れ様でした！

▲手際よく清掃を終えた塔の前で。よいお年を！

みやこの歴史発見伝93

みやこ町の古い地名4

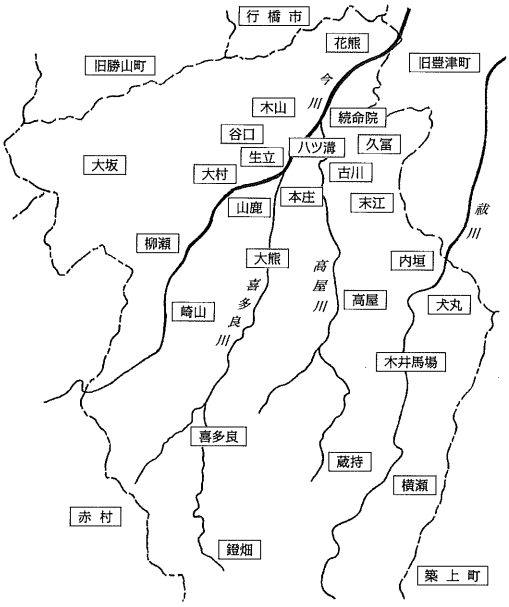
犀川地区1

今回からは犀川地区の古い地名を三回にわたって取り上げていきます。

なお、掲載した内容は、主に『角川日本地名大辞典』、平凡社の日本歴史地名大系第41巻『福岡県の地名』及び『犀川町誌』などを参考にしています。

犀川

最初に、犀川の地名の由来についてですが、犀川は今川の昔の呼称で、流域の集落には「塞ノ神」信仰に関係する小地名が多く、川の渡し場あたりに塞の神を祀っていたことからサイ川と呼び始めたとされています。



▲犀川地区の大字

蔵持

蔵持は高屋川の上流に位置します。

神宮皇后が三韓出兵の折に、上宮三神に祈り、帰陣の際、日月の鞍を奉納したことから鞍用山と称し、のちに蔵持山と改めたという伝承があります。

またこの説とは別に、建保元年（一二一三）前後に成立したとされる「彦山流記」では彦山四九窟のうちに「第二蔵持窟」をあげ、「静暹聖人之建立」とします。静暹は天慶（九三八～九四七年）初めに没したとされます。

空鉢が門司関に飛んで、関に入った船の積米を持ち帰ったので、当山に蔵庫を建立し、蔵持山と名付けたとされます。空鉢は聖観音の化身といわれます。

高屋

高屋は蔵持の北方で高屋川のやや下流に立地します。

地名は非常に古いもので、大宝二年（七〇二）の「豊前国丁里戸籍」には高屋勝羊・高屋勝伊佐売の名が見えます。

当地の橘社はもと大江国館所領で府社でありましたが、保安二年（一一二一）三月八日、源師卿（重資）により宇佐宮千手陀羅尼転読料所として赤幡社・広幡社（築上町）とともに宇佐宮に寄進されました。

蔵持山神社には県指定の文化財が数多く、天然記念物の大杉、有形文化財の金銅十一面観音懸仏・銅製鰐口などがあります。

▲金銅十一面観音懸仏

末江

末江は高屋とは小丘陵を隔てた東側の小谷に位置します。

地名は古代の須恵器の産地から起こったものとされていますが、路の行きづまり、山谷の行きづまりの意かもしれません。

末江遺跡の古墳時代の集落跡からは古式の須恵器が多量に出土しています。

▲末江遺跡の各種須恵器

八ツ溝

八ツ溝は高屋川が今川に合流する付近に立地します。

地名の由来は、河川の合流点のため溝が多かったことによるものと考えられています。

元禄年間までに木山村から分村して成立しました。

古川

古川は八ツ溝の東側で高屋川の東岸に立地します。

当地は高屋川と今川が合流する地点で常に河床が変わっていましたが、治水事業で堤防を構築し河床を固定しました。その際もとの河床を古河と呼び古川に転じたという説があります。

古川集落南方の丘陵にあるいこいの里では、建設に先だって弥生時代の集落跡や古墳時代の墳墓が発掘されました。集落内の浄土真宗本願寺派慈光寺は中世後半に西郷氏によって創建されたといわれます。

久富

久富は末江の北方の丘陵裾部に位置します。

地名はこの地を開いた有力者がその支配の長久を願ってつけた好字佳名と考えられます。

弘治二年（一五五六）四月十三日の「大内義長宛行状」写によると、大内氏はもと怒留湯勘解由左衛門尉が知行していた仲津郡久富村の地八町一反余ほかを右田十郎鑑康に与えています。

続命院

続命院は久富の北西で、今川の沖積地に立地します。

地名の由来は、承和二年（八三五）大宰府の近くに設置された行路病者のための施設続命院と同じく、豊前国府に属する同趣旨の施設があったからという説と、右の施設を経営する費用に充てるための田地である「続命院田」を省略して続命院となったという説とがあります。いずれにしても平安時代にさかのぼる古い地名です。

（末永弥義）